

史料館この1年を振り返つて

史料館にとってこの一年は近年にない変化と実りのあつた年といえると思う。

◆財産区管理会との協議会設置

設置母体の財産区管理会と話し合う場を、協議会という形で明文化し制度化した。これまで、財産区の委員の方々と胸襟を開いて話し合う場があまりに不足し、意見交換をする場がなかつた。言わなくても分かつてもらえる、中身のある活動をしていれば理解してもらえる、と思い込んでいた。

思い返せば史料館を作った時の財産区管理会長の太田垣正雄さんは、村史の編纂を昭和十七年に着手した時の本庄村の助役。その後、昭和二十年の空襲で深江は焼け野原。村長代理として復興に奔走し、三十年を経て財産区管理会会长になった。村史に対する思い入れは誰よりも強かった。志井正雄さん、志井保治さん、岡田龍太郎さん、松尾福夫さん、深山健一さん、中尾久一さん、当時の委員はみなさん戦災でふるさとの焼失の悲惨な体験を持ち、歴史を記録することの大しさを言わなくても分かつてもらえた。

でも今は違う。意味を丁寧に説明し理解してもらう努力が欠かせない。言わなくても分かつてもらえるというのは、通用しない。協議会で顔を合わせて話し合う中で理解も進んだと思う。

史料館の活動を財産区委員のSNSでPRしてもらえるなど、あるべき姿ができつつあると感じている。

◆ウクライナと深江文化村に焦点

展示も新たな展開があった。本誌で有吉研究員が報告しているように、今年度は深江文化村を舞台にした白系ロシア人やウクライナ人の存在に焦点を当てた。マスコミに取り上げられ、見学者も増えた。新たな寄贈品があった。第二次世界大戦中でも深江には白系ロシア人が居住し続けたという、新たな研究成果も生まれた。前年に行つた地域の方々や東灘高校の生徒たちとの「深江音頭」復元の成果も企画展示で続けた。例年なら恒例の季節展示に切り替えるところだが、それをしなかつたのは、地域と歩む史料館でありたいと願つたからである。

またしばらくなかつた甲南大学の博物館実習も久しぶりに実施した。予定していたところでできなくなつたとのことで、役割を果たせた。

地域や大学との連携、新たな史料の発掘、新たな研究成果、そして発信と、理想的な展開ができた一年でもあつた。

◆本庄港のスケッチ画寄贈

ふるさとの懐かしい風景を描き続けた御影在住の田中邦彦伯（故人）の絵画をお嬢さんの山田良子さんから寄贈を受けた。昭和三十七年ごろの本庄港の風景画などが含まれている。失われた風景の記録としてこういう収集もあつていいと思う。令和五年度に企画展示を予定している。

◆予約図書サービスの現状

神戸市立図書館の予約図書受取や図書返却サービスも堅調だつた。令和四年度（二〇二二）統計は、貸出冊数は月平均一二三五・六冊、返却冊数は一二九五・七冊だった。貸出を利用

